

## 第24回 大阪府学校教育審議会 概要

日 時：平成20年1月29日（火）14：30～17：30

場 所：ホテル京阪 京橋「かがやきの間(東)」

出席委員：竹内会長、米川会長代理、一色委員、大國委員、尾崎委員、川戸委員、  
志水委員、千本委員、中井委員、森田委員、吉村委員

◎：会長 ○：委員 □：事務局

### ◆はじめに

◎：寒い中、出席いただき感謝。

今回は、「障害のある幼児児童生徒の自立を支援する教育のさらなる推進」と『入れる学校』から『入りたい学校』に向けた府立高校のさらなる充実』について議論した。前回のまとめは資料の中にあるとおりが、前回の復習を兼ねて、事務局から説明をしていただく。

### ◆幅広い教育ニーズに応える学校づくり、生徒の「自立・自己実現」の支援について

◎：論点は3つだが、それ以外にも自由にご発言いただければと思う。1番目の論点については前回意見をいただいたが、さらに意見があれば併せてお願いする。質問等でも結構。

○：資料3は分かりやすい。H10から19にかけての取り組みについて、前回も少し述べさせていただいたが、先生の仕事をはっきりさせていただきたいと思っている。入りたい学校に向けてメニューはそろえたが、生徒のニーズに応えたものになっているかどうか。これ以上メニューを増やすことは難しいだろう。

高校についてはこれ以外にも私立というメニューがある。私立を無視して公立学校だけのことを考えても仕方がない。エルハイスクールは私立と受験競争をしていると思う。前回、事務局ではエルハイスクールの進学実績を把握していないということだったが、エルハイスクールは私立と勝ったり負けたりしながら競争していけばいいではないか。

考えないといけないのは、中退の問題。私立ではどんな対応をしているのか私なりに調べているが、私立のほうが柔軟に対応している場合もあると思う。教育の課題として進学・就職・中退があるが、こういった課題に対しては、公立と私立が、競争も含めてしっかり連携していくことが必要である。

◎：先生の仕事が増えることを懸念するのは重要な視点。大学でも「改革疲れ」という声も聞く。「あれもしろ、これもしろ」では、当事者の教員は疲弊する。「改革は成功したけど教育は死んでしまった」では意味がない。教育においては、改革の趣旨に反対する人はいないと思うが、ポイントを絞らなければ。行政が改革を指示するのではなく、現場の自主的な動きを支援することが必要。私立との連携についても考えないといけない。

○：質問だが、特色づくりの検証状況だが、3ページ目に「成果」として『入りたい

学校』という観点での進路選択」や「目的意識をもって入学」「学校の教育力の向上」について書かれてあるが、その根拠はどこにあるのか教えてもらいたい。

- ：8月の末に、客観的データによる中間まとめをとりまとめた。その後、公立中学校の教員等、各種アンケートや意見交換を実施し、この中で声の大きかった部分を掲載している。一方、中退率でみると全体でみると低下傾向だが、学校によっては上がっているところもある。

この冊子は、再編整備がひとつの節目にきたこの時期に、個々の学校からの報告も含めて、平均的な傾向を示させていただいたもの。

- ：おっしゃることは良く分かるが、中退率について、改革校は下がったが、全体として上がっていたら、全体を評価することはできないと考える。それぞれの学校はがんばっていることは良く分かるが、全体としてどうかという観点をもたないと検証としては不十分。

- ◎：ヒアリングで聞いた場合はいいことしか言わないと思う。企業であれば収益等分かりやすい指標があるが、教育評価のメソッドについても今後考えていけばよい。ただし、教育評価は多次元の尺度があり難しい。

- ：幅広い教育ニーズに応えるために10年間やってこられて、メニューは増えたが、それが本当に良かったかの評価をしておくべきだと思う。系列、エリア、ワールド等、子どもたちに理解されているのか。用語についても整理する必要がある。また、これだけの系列を増やして担当できる教員がいるのか。いきいきと教えられるのか。ある府立高校から、カウンセリングの講座を開設したいが教える人がいないので、教えることができる人を派遣してほしいとの依頼が大学にあった。その依頼を受けて、大学院生が教えに行った。

私は、カウンセリングの勉強がしたいという生徒のニーズがあっても、それをそのままストレートに受け止めてすぐに講座を開設するのはいかなものかと思う。それよりも大切なことは、カウンセリングを勉強したいという生徒のニーズの背後に何があるのかを深く探ることだと思う。

メニューが広がったこと自体は評価する。

- ◎：needとwantは区別しなければならない。したいことをそのままするのは少し違う。多様化のデメリットも押さえておかないといけない。その件に関して、本日欠席している委員から意見が出ているので、かいつまんで紹介する。

(委員の意見紹介)

- ・府立高校が多様化した。が、進路指導に混乱のないように情報を伝えていく必要がある。
- ・大学への情報提供も不可欠。
- ・キャリア教育については、ともすると進学校ではあまり行われませんが、すべての学校でやっていくことが必要。
- ・キャリア教育は「生き方教育」と「働き方教育」を統合することが必要。

- ：いろんな学校が出来たことは評価するが、実際にはどう違うのかが分かりづらいのが現状。多様化しすぎて基礎基本がおろそかにならないかとの懸念もある。いろんな学校をつくるのは必要だが、基礎基本なくして、個性はありえない。基礎基本は

芸における型。スポーツでいえば走りこみ。日本一になるためには日本一の基礎があると思う。

中退率については、数値にこだわる気はない。中退して別の道に進んだ方が良い子もいた。ただし、別の道があればよいのだが、そうでなければ厳しい現実が待っている。そのため、学びなおしをするニーズに応える通信制課程の役割は大きい。こういった教育機会の提供の工夫をしていくことが必要。

◎：大学においても学部は多様化しているが、何がベースになっているのかわからないものもある。多様化の中でも基礎基本は重要。その上での取り組みが重要。「国家の品格」の藤原さんは、学校教育は国語だけやればよいという。これは言いすぎだが、言わんとしていることは基礎基本が大切だということだと思う。

○：この間ずっと大胆な高校改革をしてきたと思う。選択肢は増えたが、生徒の学力層によっては、逆に選択肢が狭まっている場合もある。このような生徒層が入学する高校への支援策が必要。

改革の成果と課題についてはしっかり検証し、良いところは伸ばして、悪かったものは改善することが大切。今後は行政主導ではなく、現場主導で、現場からのやる気を支援するほうがよいと思う。

中高一貫教育について、能勢地域の成果は出ているが、他の地域でやってみたいという声はあがってきているのか。専門学科に関して、現場からこういう学科をとという声はあがってきているのか。

□：能勢の成果については、府立学校に広める努力はしており、現場からの声もあがってきているが、現段階では大きな声とはなっていない。学科やコースについては、特色づくりを進める中で、積極的に改革されているケースもある。最近では布施北のデュアルシステムをコース化したいという声もいただいた。現場の声を聞きながら進めて行きたい。

○：この10年間で選択肢が拡大したことは事実だと思う。そういう意味での制度改革はひとつの区切りだと思う。今後は制度に魂を入れること。それは教委で話し合うものではなく、現場がどれだけ元気になるかということ。教育を実践するのは教員である。現場からの評価がないと真の評価はできない。アメリカでも改革しようとしてなかなかうまくいかないのは、文書で改革しようとするから。実践がないと改革は進まない。

学校が自立性を増していく中で、それを支援し、もう少し学校に裁量権をもたせることを検討するべき。学校評価については、教育活動に対する評価とマネジメントに関する評価の両方が必要。wantをneedに変え、それを確認する場が要る。今後の府立高校の裁量拡大の方向性はどうか。

□：19年度から一律80万円の校長裁量経費をつけたところ。また、スクールカラー集中支援事業として、特に取り組みたいプランを教委に出してもらって、500万円程度を10校につけた。例えば西野田工科高校は屋上緑化。プレゼンをしてもらい、教育委員にも参画していただいて選んだ。

◎：競争率はどれくらいか。

□：1次で8倍くらい。少ないお金をばらまくのではなく、何かをするためには集中的

に投資することが必要だと思っている。

- ◎：8倍では倍率が高い。せめて2～3倍になればいいが。
- ：改革対象校以外の学校の取組みへの支援をしてもらいたい。  
また、特に設置数の少ない学科やコースについては、府域全体でのバランスを考慮すべき。地域によって設置の偏りが出ないようにするべき。
- ：多様化して選択肢の幅が広がったことは評価できるが、「入ってよかった」と思える学校づくりが重要。資料を見ると、「入りたい学校」と思って入っても、在校生の満足度アンケートでは、高くて8割、6～7割の満足度となっているところもある。あとの3～4割の生徒はどうしているのか。それでよかったのか。今後、在校生の状況も含めて検証に力を入れてもらいたい。
- ：冊子の10ページ、総合学科で学んでよかった生徒は86%だが、それ以外のタイプの学校はどうかという指摘だと思う。「よくあてはまる」の割合をさらに高め、全体的にボトムアップしていかねばと思う。多様化しすぎて分かりにくいという声が大きかったのは事実。情報提供を的確に、実績についても的確に示していきたい。
- ：進路の相談を中学生から受けているときに、どこを受験したらいいのか、どの学校でどんなことをしているのかイメージがつかめないということが多い。受験できる学校は増えたが、各学校の特色などについてはっきりとした詳しい説明を先生に聞いても分かりにくいということが多い。リーフレットはあるが、生徒の側からの「何を勉強したいのか、何になりたいのか」から入っていくという発想のものではないように感じる。学科名から具体的なイメージが分かりづらく、子どもが選びやすいネーミングが必要。中学校の先生にも生徒にも分かりやすいように情報提供することが重要。
- ◎：yes, noで進んで行くフローチャートみたいなものがあったもいいかもしれない。
- ：教育委員会議でもわかりやすい資料の作成が必要とのご指摘をいただいたところ。中学校の先生や生徒がわかりやすい資料を作成していきたい。
- ◎：そういうことを考えることが、キャリア教育のきっかけにもなる。
- ：最近では、保護者や生徒への学校説明会もそれぞれ工夫して実施している。
- ：個々の学校の説明会ではなく、タイプ別のいくつかの高校が集まっての説明会や研究会は行われているか。例えば、アクティブハイスクールはどういう取組みをしている学校なのかというような、タイプ別の高校の全体像を伝える取組みはしているか。
- ：発表会や説明会をやっている。例えば、産業教育フェアでは工科高校での取組みを発表している。普通科総合選択制の発表会もある。エルハイスクール等、教育委員会の事業の中でも情報発信する機会があり、それは年々拡大している。
- ◎：特色づくりについては、後半でもご意見いただければと思う。

<休憩>

◆特色づくり・再編整備の成果と課題を踏まえた府立高校の充実について

- ◎：先ほどⅠの論点「幅広い教育ニーズに応える学校づくり」についてたくさんご意見いただいたが、ⅡとⅢについてウエイトをかけて議論いただきたい。通信制課程について現状はどうなっているのか。
- ：通信制は、府立桃谷高校でやっている昼間部、日夜間部で 2000 以上の学生が学んでいる。中学を卒業した生徒と、編転入が半々ずつ、中学校卒業後は過年度生も多い。府内唯一の公立の通信制高校である。いろいろな講座をもっており、様々な試みを行っている。
- ◎：課題はあるのか。
- ：桃谷高校はクリエイティブスクールもあるので、そこののかかわりがあるが、通信制については、うまくいっていると思っている。今年度はクリエイティブスクールで秋季選抜もおこなったところ。
- ◎：通信制も学習機会の提供の大切な制度である。
- ：桃谷高校の役割は大きい。しかし、1 校だけである。ここに対して府は支援をしていくことは重要だと思う。
- ◎：通信制課程についても財政的にサポートしていくことは大切である。
- ：午前中、静岡県で人権教育の研修をしてきた。そこで大阪の教育の宣伝もしてきた。障害のある生徒の自立支援など「ともに学びともに育つ教育」の話もした。我々が調査した範囲では外国人の子どもの高校進学率が一番大阪が高いと思う。欧米的にいうとインクルージョンが進んでいる。特色ある高校、いい感じで改革をすすめている学校がある一方で、しんどくなっている学校もある。その生徒をどのようにサポートするかを考えたときに、エル・ハイスクールなどについては、私学とも競いあって実績をあげてもらいたいが、公立学校の基本は地元地域に根ざすことである。大阪大学のスローガンも「地域に根ざす、世界に伸びる」である。高校にしてもその側面が必要である。地域とのつながりの中で人間関係のネットワークが大切である。それは高校も同じで、中学校や地域の職場とのつながりも重要だ。地元とのつながりをいかに広げていくかにアイデアやお金つぎ込んでいただきたい。それから、私は学区は多いほどよいと思う。学区が少なくなれば地域とのつながりがより薄くなる。4学区は守っていくべきと思う。
- ：大阪の教育の特徴は地域性と多様性だと思っている。能勢のような取り組みも広げて行きたい。小・中・高が地域に根付いた学校づくりの中で、教育フェスタや中と高が一緒になってコーラス・プラバンをやっているところもあるし、高校が中学校に出かけて行って授業を見てもらう取り組みもしているところもある。学区制については、今後、新知事にも話をしていかないといけないと考えている。受験のあり方についても、時間をかけて検討、対応していきたい。
- ◎：セーフティネットの一つとして、人と人とのつながり、相互扶助、ソーシャルキャピタルが必要だ。アメリカ社会もかつてはそうだったが、それがなくなった。ポーリング・アローン、一人でポーリングをするような社会。日本で言うと、一人カラオケみないなもの。絆がなくなることは、見えないセーフティネットがなくなること。教育の問題でもソーシャクキャピタルを考えないといけない。
- ：大阪の高校を 10 年見ていると、改革をすすめていると思う。小中高のなかで最も

改革が進んだのは高校である。その意味では評価している。多様化路線を進んできたが、多様化がいいかどうかは議論のあるところだが、ニーズに応えるためには、多様化必要である。日本では中学までは学力をいわれるが、高校においても、ニーズと学力は両立するべき。多様化が進むと、前菜料理ばかりになり、メインがなくなってしまう。基本となる共通したベーシックの枠組みについても検討するべき。地域との関係、教育の自由との関係も必要である。東京では自由を主眼にしているが、メリット、デメリットがある。高校のタイプによって、地元密着型、そうでなくて良い学校もあると思う。例えば、松原高校は地元地域を大事にしてきた。能勢高校も同様である。逆に流入、流出が多い地域では地域密着もむづかしい。学校の状況に応じて選択することも必要かと思う。学力を保障しながら、ニーズに応える。地域と自由のバランス感覚が必要だ。それをするためには共通の枠組み、目指すべきもの、得るべきアウトカム<sup>アウトカム</sup>の共通認識が必要である。

- ：中高一貫教育について、私学では高大連携の時代に入っている。自己実現のためにどうすればいいのか。広い視野で評価をしておいてみる必要もあるかと思う。
- ：府立高校はメニューが多様過ぎて分かりにくい。私たちの世代では学んでいない科目もたくさんあるのではないだろうか。それらの科目ごとに、実際どれだけ成果が上がっているかを検証しないといけない。それは、生徒のアンケートで検証できない。専門家がすべき検証である。生徒の要求に応じすぎると易きに流れ、イベントに終わってしまう。成功しているケースもあるだろうが、看板倒れになっているものもあると思う。府立学校に入ったら、ここまでは身につくという基本的な水準を保証し、その上で余力があれば、多様なメニューを提供するというのでなければならない。現状では、現場の教員に余力がないのではないか。教員に120%のちからを出させている環境では改革はできない。教員に一定程度の余裕ある環境でなければ、改革はできない。
- ◎：論語に「学んで思わざれば<sup>くら</sup>罔し、思いて学ばざれば<sup>あやう</sup>殆し」という言葉がある。受験競争が激しい頃にアメリカの文化人類学者が言った言葉に、日本の教育は学んでも考えないからいけないと。一方、アメリカは学ばないけど自分の意見ばかりを主張する。ちょうど半分になればよいと思った。しかし、今の日本もそうなっているのではないか。日本もあと10年したら、元にもどると思う。どの府立高校に入ってもベーシックなことはやるというふうに。でないイベント的なものになる。多様化は基本的にはよいと思うがこの点を考えるべきである。
- ：私も同感である。現代の子どもたちはモダンからポストモダンのようになっており、乖離して個々細分化される。個々を助けるためにはそれぞれの方法が必要だが、基礎基本の理念をしっかりとっていないといけない。食いつかせた上でどうするか。食いつかせ論と本質論、どのように両立させるか。教育者の構えも磨いていくべき。おもしろさを手がかりとする多様化からの次のステップの本質論への移行を考えていかなければならない。
- ◎：両方が循環するようになればよいのだが。かつては学ぶことの意味付けが受験にあったが、今は勉強することの必要性についても、しっかり学ばせないといけない。

- ：子どもたちの選択肢、学びに対する意欲を持って、学校を選択することは重要である。そのための情報は大切。入学者選抜制度に関わることだが、前期テストに37%、後期テストは普通科のみ。私学を含めたら半数以上の子どもが2月には進路が決まる。その弊害も出てきているのではないか。37%は結果としての数値。2月末で決まると浮き足立って、本当に何がしたいのではなく、早く決めてしまいたいという思いで選ぶ傾向がある。先ほど教育長が言われたが、今後研究していく必要があると思う。これまでの改革が良かったかどうか時間もかけて専門的に検証していただきたい。調査書と入学試験の割合も気になる。入試の結果の割合が実際は大きいのではないかと危惧したがそうでもない聞き安心したが。普段の中学校での教育は絶対評価、しかし調査書は相対評価であり、その問題もある。学校規模についても、学校の特色づくりによって変わると思う。主体的な学校を選択によって、幅を持たせてみてはどうかと思う。
- ◎：学級規模についてはその通りだと思う。学校によっては、少ないほうが良いところもあれば、そうでなく、スケールメリットがほしいところもあるだろう。弾力的に対応するべきだと思う。入試をめぐる問題について事務局からいかがか。
- ：資料9を参照していただきたいが、平成3年度の専門学科の一次選抜の実施にはじまって、受験機会の複数化を実施してきた。学力だけではなく、総合学科による面接、テスト、調査書のウエイトの弾力化もやってきた。特色のある学校の選抜を前期にしている。今年度から通学区域が4学区になったことにより、受験できる子どもの高校は増えたが、早く決めたい結果、前期に集中するという現場の意見が出ていることも確かである。
- ：学校規模の問題であるが、学級規模についても人数ではなく、その中にいる構成員が重要である。学校規模も然り。クラブ活動についても一定の規模が必要だ。生徒指導、クラブ活動等の状況により6学級、10学級でも良いという選択を校長がするのなら、そのほうがよいと思う。選抜については、早く決められる学校で決めてしまうと、あとでしまったと思うこともある。特色づくりについて検証の上、幅広い進路選択をできるように検討してもらいたい。
- ◎：新しい学区制になった影響もあると思うので、そこも含めてフォローしていただきたい。本日欠席の委員から、メッセージをいただいた。紹介する。「受験機会の複数化に伴い、中学校での進路指導を充実させ、中学生に自分の『入りたい学校』のイメージをしっかりと描かせることの方が重要だ。中学生がそれぞれしっかりと考えて受験する高校を決定するならば、高校の中退も減るのではないか。現行の入学者選抜制度については、中学生が主体的に考えて受験する高校を決定できているかどうか、メリット・デメリットをきちんと整理した上で、今後どうしていくのかをじっくりと議論していく必要がある。中学校でも進路指導を充実させて、自分の選択肢について自主的にももっと考えさせるべき。それができているかどうかの検証も必要。」
- ：私は、昨年学生と一緒にフィンランドに行ったが、そこである校長と知り合った。彼は、日本の学校には授業研究があるから行きたいという。教員が自分の授業を向上させるために切磋琢磨し、情報を共有して力量を磨きあう習慣があることをぜひ

ともフィンランドにも導入したいと思うと言っていた。ヨーロッパやアメリカではそのようなことはあまりやっていないようだ。ある府立高校では非常勤も含めて授業研究をしていると聞く。先生の自己研修の機会を大切にするべきである。広島県教委のHPでは、3、4年前だが、すべての高校で授業研究しているというが大阪でもやるべき。私も時々授業を見せていただく機会があるが、授業がものすごく上手な先生がいる。いいところを共有しないのはもったいない。高校に入学していい教育を受けるための先生の自己研修、それを確保するための教員の余力があるのかどうか。教員が自分たちの仕事を開発し研究していくための余力は必要だ。研修のありかたについても見直す機会を増やすべき。多くの教員はまじめに取り組むと思う。

- ：具体の数字が無いが、委員の意見は非常に貴重だと思う。現在、教育センターでは、教員の自己研修を支援したり教育相談に力をいれているところである。本年度はカリキュラム・ナビ・プラザを作り、個別の相談に応じたり、学校へ年間 1500 回出かけて行って、授業づくりや学校づくりを支援している。この半年間の教員の来所数は 5000 件以上あり、今後も充実させていきたい。
- ◎：OECDのPISAの学力調査結果をみると、びっくりするのは、日本の高校生は読書時間が最下位に近いこと。学力はそうでもないが。フィンランドはトップくらい読書をする。学校図書館、公立図書館の利用率が高く家に本がなくてもハンデがない。日本の学校図書館は貧弱で、新しい本が入っていない。寄贈をうけるとか、学校図書館の充実は重要な課題だ。可能なら検討してもらいたい。
- ：図書の話が出たが、子どもへの読み聞かせも重要である。今の親はなかなかそれができない。読む、書く、聞くが重要。そこの部分について、これからは広い年代について底上げすることが必要かと思う。高校改革についても、新たな課題を投げかけるのではなく、それを検証し実践する時間を与えるべきではないかと思う。カリナビへの先生方の問い合わせは、自分の授業に自信がないのか。それとも新たな改革への悩みなのかどうか。
- ：授業づくりでは、経験の少ない教員からの相談が多い。熱意はあるけどその方法が分からないというようだ。これまでは小中からの相談が多かったが、高校からの相談も多くなってきた。
- ：10年間の多様化の改革は教委がかなりオープンにやられていることを高く評価している。行政の世界では慣行だと思うが、いったんはじめたらやめられない傾向が多い。ぜひ、いろんなことをやったが、うまくいかないことがあれば、方向転換も考えるべきである。生徒の食いつきが悪いという話もあったが、私は、覚える、分かる、好きになるといっている。覚えるのはつらい作業だが、中退は覚えるという最初の作業でつまずいているからだと思う。多様化と基礎基本、どちらも重要だが、何を残すか、なにをやっていくかについて、現場の意見をもとに選択していくべきである。金がないからと言って思考をやめないでほしい。大阪府は全国ではじめて高校の授業料上げた。上げた部分は特色ある学校づくりに使った。
- ：入学者選抜方式についてだが、中学校から見れば、前期に流れる傾向にあるということだが、例えば大学でも試験機会の複数化を進めているが、府立高校は同じ校種

では1回である。良い子は前期に流れる傾向にあると思う。高校入試を1回にできないか。それか、すべての高校を2回にするとか。

- ：かつて工業高校で2回受けられることもあったが、2回目に合格する子どもが多いことから、その意義が薄れたため、前期にいった。
- ◎：京大の教育学部でも2回にわけても、結果は合格者が同じであった。
- ：あとに回った学校が不利益を受けているのではないかと思う。今の受験方式がベストであるとは思っていない。前期は特色ある学校の選択、学校の種類によって選択している。同じ土俵で選んでもらったほうがベターだと思う。
- ：Ⅲの特色づくり・再編整備のテーマについてだが、資料冊子の63ページにあるところで、教員は特色づくりを理解しているとあるが、その数値にかなり差があると思う。多部制単位制高校と全日制普通科単位制高校の2つの学校に対する肯定的な回答の割合が低いことが気になる。農業高校や総合造形高校もチェックする必要があると思う。結果がでたことについての、事務局のコメントがほしい。
- ：多部制単位制高校と全日制普通科単位制高校で、前者は柔軟なニーズに応えるものだが、母体となった学校があるので、制度として新校が周知し切れていないことがある。後者は制度として新しく、理解が深まらなかったのではないかと思う。
- ◎：そろそろ時間もまいったようだ。更なる意見があれば、次回にもお願いしたい。事務局でもまとめるし、議論の総括も今後行いたい。